



Title	『意味の論理学』における「表象」と「出来事」の理論
Author(s)	平田, 公威
Citation	年報人間科学. 2017, 38, p. 51-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60465
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈論文〉

『意味の論理学』における「表象」と「出来事」の理論

平田 公威

要旨

『差異と反復』において、ドゥルーズは、即自的差異を思考するために、同一性の優位を批判し表象を退けていた。しかし、超越論的領野を描くという同じ意図にも関わらず、ドゥルーズは、『意味の論理学』で、出来事は表象されるべきものであると論じている。ここに、ドゥルーズの態度の重要な変更があることは確かである。

本稿では、ドゥルーズが、『意味の論理学』へのストア派の物体と非物体的なものの二元論の導入のために、出来事(非物体的なもの)の物体化と表象の理論を問題化していると考え。まず、われわれは、ストア哲学に焦点をあて、非物体的なものの表現を含み非物体的なものを物体化する表象の理論を明らかにし、ドゥルーズが、出来事の表現と思考のためにこの表象を必要としていることを示す。この試みは、『意味の論理学』の狙いとその限界を明らかにするだろう。

キーワード

表象、出来事、実現、表現、ストア哲学

はじめに

本稿では、『意味の論理学』における「表象」に着目し、特に、表象が果たす出来事の実現、その表現の理論を明らかにする。以下では、『意味の論理学』が、理論上、表象を必要としていること、そこに託した位置を明らかにし、最終的には『意味の論理学』の言語論について一考する。

これまでにもしばしば論じられてきたように、ドゥルーズの表象概念に対する態度は否定的なものとして知られている。実際に、ドゥルーズは、第一の主著である『差異と反復』において、表象が、同一性の優位の下で差異を飼い慣らしてしまうことを痛烈に批判し、「即自的差異」を救い出すための思考を展開している。簡潔に言えば、表象とは「超越論的な錯覚の場」(『差異と反復』p. 341/下255頁)であり、そこで、差異は「付き合いやすいもの」にされてしまう。『差異と反復』では、差異の表象は、避けるべき事態として記述されているのである。

これと同様に、ドゥルーズはその第二の主著『意味の論理学』において、出来事の姿形を描くために、同一性に依拠した思考を批判している。しかしながら、表象そのものに対する態度は変更されている。たとえば、次の一節は、出来事の認識にあたって、表象にいくらか肯定的な役割が担わされていることを示している。

出来事は、到来すること（事故）ではなく、到来することのなかで、われわれにサインを送りわれわれを待ち受けている純粋な表現されるものである。先に述べた三つの規定によるなら、出来事は、到来することのなかで、把握されるべきもの、意志されるべきもの、表象されるべきものである。（LS p. 175/ 上 260 頁）

『意味の論理学』では、出来事＝意味は、言葉の条件として語られ、その議論の中枢に据えられている。上に引用した一節は、言葉の条件を問う『意味の論理学』の核心にあたる一節であり、そこで出来事が「表象されるべき」ものとして語られていることの意義は看過できない。ここでは、明らかに表象を最大の批判対象とする『差異と反復』とは異なる態度が取られているためである。

それでは、なぜ、『意味の論理学』において、出来事は表象されなければならないのであろうか。本稿は、『意味の論理学』における表象と出来事のほとんど不可分な関係を示す。これにより、『差異と反復』と『意味の論理学』における表象に対するドゥルーズの態度の違いが明らかになり、両者の哲学的な企図の相違も浮き彫りになるだろう。以下では、ドゥルーズの表象における同一性の優位に対する批判を整理し、その上で、『意味の論理学』における表象の理論を読解する。

表象における同一性の優位への批判

ドゥルーズの表象批判の要点は、表象が同一性のもとで差異を捉えてしまう点にある。『差異と反復』において、同一性は差異の「戯れ」の結果として生じるに過ぎず、表象は二次的なものに過ぎないとされる。こうした批判のなかで、無限大と無限小の表象が、幾らか肯定的に取り上げられつつも、最終的に棄却されているように、『差異と反復』では、終止、差異の表象は避けられるべき事態として論じられている。『差異と反復』の関心は、あくまでも即自的な差異に向けられているのであり、表象は同一性をもたらす契機として理解されるのである。

『意味の論理学』でも、表象は同定可能な対象に関わるとされており、確かに、『差異と反復』における表象と同一性への批判が、部分的に繰り返されている。その主眼は、物的に同定可能な対象に、出来事という非物的なものを還元してしまうことにある。ここでは、静止することのない物体の生成とその意味的な分節が取り上げられており、そのなかで、対象の同一性が問題とされている。幾つか論点を先取りすることになるが、『意味の論理学』の基本的な骨子を確認するためにも、出来事と同定可能な対象に関する議論を概略しよう。

『意味の論理学』では、意味という非物的なものとの物体の関係が問われるが、その関心事のひとつは、物体の意味的な（すなわち非物的な）分節にある。物体の運動は、意味的な測度がなければただ流れ去るしかない。たとえば、眼前で繰り返される物体の運動は、「歩く」という測度により、「カトーが歩く」として分節される。こうした分節がなければ、運動はひたすら後続する運動へと送り返されることになり、

静止することがない。言葉により表される出来事（すなわち意味）が、その分節として作用し、運動に測度を与えるのである。ここで出来事が非物的といわれるのは、「歩くこと」そのものが物体には還元されないためである。たとえば、われわれは眼前の物体から「歩く」という出来事を見出すのだが、その「歩くこと」そのものは、手足の動きに還元されることがなく、その始点も終点も指定することができない。「歩くこと」は、足が上がったときにも、足が地面に着いたときにも、すでに始まっていたということができるように、どこに始点（または終点）をとったとしても、それ以前、あるいは以後に逃れ去ってしまうのである。また、そもそも「歩くこと」といった測度なくしては、「足」のように物体を分節することすらできないだろう。このように、それとしては同定不可能な非物的なものが、われわれの認識を条件づけており、「カトー」や「足」といった同定可能な対象を分節する。「歩くこと」は、このような同定可能な対象のもとで、「実現」しているものであり、それにより表現されることになる。

ところで、このような対象のもとでの実現は、本来的に同定不可能な出来事の純粋性を損なってしまう。実現されることは表現されることであるが、出来事には、実現には尽くされない部分があるためである。すなわち、「一方に、実行され完了される出来事の部分があり、他方に、「完了しても実行されない出来事の部分」がある」（LS p. 178/上264頁）。同定不可能な純粋な出来事は、その実現に「閉じ込められる」（LS p. 188/上280頁）のであり、その過剰な部分は実現されず「失墜 [ruine]」（LS p. 196/上292頁）してしまふ。表象は、「カトー」や「手」「足」のような同定された対象のなかに出来事を閉じ込めるのであり、そこに宿ることで出来事の純粋な姿形は失われてしまうのである。言葉の条件を探究する『意味の論理学』では、このように同定された対象に実現した出来事と、純粋な出来事の姿形を取り違えることが批判されることになる。この批判は、われわれの経験に構成的な対象を思考するために同一性を標的とする側面において、『差異と反復』の表象批判と軌を一にしているといえるのである。

したがって、『意味の論理学』を『差異と反復』の延長線上で論じる限り、出来事は「表象されるべきもの」とはいえない。この疑問に答えるには、『意味の論理学』に固有の思考に着目する必要がある。本稿の見立てでは、『意味の論理学』の物体の次元に関する記述の前景化が、出来事の表象を要請している。結論を先取りすれば、物体として生きるわれわれには、純粋な出来事（純粋な非物的なもの）はまずもって実現されないことには思考されえず、そのために、物体と非物的なものを交差させる表象が必要になるのである。

こうした表象における物体と非物的なものとの交差について、ドゥルーズは以下のように語っている。

エピクテートスとマルクス＝アウレリウスによって最高点に達した技法であるが、表象の論理的使用とは何であるのか。伝承された限りでのストア派の表象の理論については、難解な諸点が知られている。すなわち、印刻されたものとしての物的な感覚的表象における同意の役割と本性、それ自体はまだ物的である理性的表象が感覚的表象から派生する様式、とりわけ、表象が「把握的」か否かの特徴を構成するのは何かということ、最後に、表象 - 物体ないし刻印と非物的出来事 - 効果（表象と表現）の間の差異の射程である。[……] 表現と表象の差異が頂点に達するのは、常識的な表象の

同一性の決定機関である対象 = x とパラドクスの表現の同定不可能な要素である事物 = x の対立においてである。ところが、意味は決して可能的な表象の対象にならないとしても、表象が対象と維持する関係に極めて特殊な価値を授けるものとして、やはり意味は表象に介入する。(LS pp. 169-170/上 252 頁、強調原文)

すでに見た通り、表象は、同定化として作用するのであり、本来、同定不可能な出来事が表象により捉えられることはない。この引用に即していえば、同一性の決定機関である表象と同定不可能なものの表現は峻別されるのである。しかし、ここからさらにドゥルーズはストア哲学に依拠しつつ、出来事の表現である意味による表象への介入を論じている。すなわち、「表象は表現を表象することはできないが、表象と本質を異にする表現は、表象に包含される（あるいは、包含されない）ものとして、やはり表象内部で作用するのである」(LS p. 170/上253頁)。ドゥルーズは、このように表現を把握する表象として、ストア派の「把握的表象 [φάντασία χατ'αληπεύχική, représentation compréhensive]」を理解している。本稿が問題にする出来事と表象の関係は、ここから問われる必要がある。以下では、上の引用をより詳しく検討するために、実際にストア哲学に基づいて、表象と表現の関係を精査する。

ストア派の表象と出来事

「あらゆる物体は原因である」(LS p. 13/上21頁)とドゥルーズが整理するように、ストア哲学において、物体は原因になり得るものとして定義されている。すなわち、作用を与えることができるもの、作用を受けることができるものは物体である。ストア哲学においては、神や魂も因果関係に入り得るため、物体に数え入れられており、この世界にあるものは全てが物体であるとされている。この唯物論のもとで、「表象 [φάντασα, représentation]」は、何らかの作用を受け変形した魂として定義される¹⁾。ここでいわれる変形とは、魂の性質が変わることではなく、外的な原因を前にしたときの魂の「存在の仕方 [πωσειοντα, manière d'être]」、いわゆる「様態」のことである。したがって、表象への魂の変化は、決してその形質を変えることではなく、あくまでも物体のままにとどまることなのである²⁾。

ここで、表象への魂の変形をもう少し詳しく見たい。第一に、表象は、魂に刺激を与える物体の作用を示す。したがって、表象の形成は、あらゆる物体が原因のなかにあるという事実から脱するものではない。第二に、表象は、表象を形成する魂の能動的な作用も示す。つまり、表象が形成されるにあたり、魂は単に受容的なものではない。表象の形成に際して、魂は自らのもつ固有の形質を働かせ、自己表出するのである³⁾。たとえば、犬の持ち得る表象が知覚的表象だけであるのに対して、人間の場合は、ロゴスを用いた表象が形成され得る。この二つの表象の形成には、対象を前にした魂が、いかに振舞うのかが関わっているのである。そして、このロゴスの表象こそが、出来事や意味と呼ばれる、非物的なものの表現を含む「命題 [ἀξιωμα, proposition]」(動詞を含む文)である⁴⁾。

それでは、このような非物的なものの表現はどのように位置づけられるのか。既述の通り、ストア派は、

因果関係に入り得るものだけを物体としていたが、いかなるものの原因にもなり得ない非物的なものの存在も認めていた。「すべての物体は、(それが別の物体に働きかけるとき) その別の物体に対してある非物的なものの原因となる」(SVF II 三四一)といわれるように、外的原因から、非物的なものの表現が形成される。たとえば、物体同士の運動が原因となって、われわれは、「小刀が肉を切る」といった認識を持ち得るが、この動詞を含む命題は、新たな物的原因にならないものを表現している。というのも、命題のなかの動詞は、運動の「結果／効果」としてわれわれに認識されるが、その動詞が何を表現しようとも、その表現されたものが物体に作用することはないためである。「切る」や「切られる」が物体に帰属させられるとしても、それが小刀や肉に対して物的に何かをつけ加えることはない。すなわち、動詞が表わす「意味」とは、物体の表面上で演じられる非物的な「出来事」なのである。非物的なものが、われわれの認識上の対象、思考上認められるに過ぎない対象であるため、物体の表面上で表現されることと、命題において表現されることは同一であり得るのである⁵⁾。また、全七巻に及ぶ『哲学の歴史』の執筆や『エンネアデス』やプレイアド版のストア哲学選集の翻訳といった仕事で知られるエミール・ブレイエ(1876-1952)は、この非実在性のため、命題による認識が実在に到達することはないと強調している(Incorporels, p. 62/101-102頁)。すなわち、感覚的な表象が直接に対象を捉える「対象の表象」であるのに対して、命題というロゴス的な表象は、「対象についての表象」である⁶⁾。この表象は、特定の対象の様態を捉え得るのみである。たとえば、ある物体の運動を受けて、魂は「カトーが歩く」といった表象を形成するが、その運動を「歩く」と分節するのは、あくまでも認識上のことであり、他の表象を形成することも可能である。ブレイエが語るように、ストア派の人々は、物体から非物的なものの性格を排除したが、「その一方で精神のうちにある程度この性格を認めるのである」(Incorporels, p. 12/26頁、強調引用者)。

ここから、ドゥルーズのいう把握的表象が理解できる⁷⁾。この表象は、「カトーが歩く」のように、同定可能な対象とそこに帰属させられる非物的なものの表現からなるのであり、このような表象が形成されるということは、同定可能な対象のもとで、同定不可能なものを実現させることである。ここに、異質なものを交差させるという表象の肯定的な側面を見出すことができる。この議論は、ライブニッツを踏まえて論じられる出来事の実現による個体の発生、「静的発生」の理論と重なるものでもある⁸⁾。

しかしながら、ドゥルーズは、ここにとどまらず、把握的表象(すなわち命題)という出来事=意味の「ア・ポステリオリな状態」(LS p. 35/上52頁)から、出来事=意味の純粋な姿形を取り出そうとする。このことは、ドゥルーズが、結局のところ表象による実現を退け、表象によらない出来事の表現を取り出そうとしているようにもみえる。しかし、本稿の考えではそうではない。むしろ、以下でみるように、出来事の純粋な表現もまた、表象による実現を必要とするのであり、ここにこそ、『意味の論理学』の思考の独自性が認められるのである。

表象と純粋な出来事の表現

ドゥルーズは、出来事=意味の純粋な姿形を取り出すために、命題のなかで、同定可能な対象にかかわ

る部分と同定不可能なものとの表現にかかわる部分の区別から出発する (LS p. 38/上57頁)。すなわち、「歩く」という非物体的で認識的分節にかかわる動詞と、それが帰属させられている「カトー」という同定された対象を分割するのである。しかしながら、ここで得られる動詞は、同定された物体のなかでの表現であり、すでに歪められてしまっている。そこで、ドゥルーズは、不定法の動詞という文法的形態によって、出来事の純粋な表現を復元しようとする。不定法は、活用を受けて変形させられた現在形とは異なり、いかなる人称 (同定可能な対象) にも属さず、動詞としての純粋な形態を保持しているためである⁹⁾。たとえば、既述の通り、「歩くこと [marcher]」そのものは、時空間上での実現に還元されることがなく、「カトー」や「猫」といった対象には属さない出来事の純粋な姿形を表現しているといえる。いわば、不定法は、不毛というべき空虚で形式的な表現なのであり、この表現を通じて、ドゥルーズは出来事の純粋な姿形の認識を得ようとするのである。

それでは、このような認識に到達しさえすれば、表象は不要なのであろうか。本稿の考えではそうではない。この純粋な表現は、あくまで表象に内在するのであり、その実現がなければ、考えられることもできない。それというのも、物的世界へ出来事を実現させる表象がなくては、われわれにとって、そもそもいかなる表現もあり得ないためである。このような純粋な表現と表象の関係を一考するために、もう一度、ストア哲学へのドゥルーズの記述に立ち戻り、「表象の使用 [usage de la représentation]」という概念を取り上げる。

表象の使用

ドゥルーズは、把握的表象について論じた後、表象の使用こそが、「外-表象的 [extra-représentatif] な「表象されず表現されるだけの存在性 [entité non représentée et seulement exprimée]」にかかわると語っている (LS p. 171/上254頁)。つまり、表象の使用というものが、実現されない純粋な出来事の表現に関与するのである。表象の使用そのものは、エピクテートスが、神との協働における人間の自由を論じるなかで提示した概念であるが、ドゥルーズは、ゴルトシュミットのストア哲学読解を参照しつつ、独自に解釈している。

ゴルトシュミットは、エピクテートスやマルクス・アウレリウスといった後期ストア哲学の倫理的教説を解釈して、自己自身に専念することこそが、神との協働のための確実な方法であると論じている。ストア哲学においては、神の配慮 (すなわち、自然、運命、物的秩序) に協働することが唯一の倫理として語られていたが、ゴルトシュミットは、神から与えられる各人のロゴスを用いることこそが、神との一致なのだとして解釈している。したがって、各人がなすべきことは、外的な原因に左右されず、自己自身もつロゴスの働きに専念することなのである。ゴルトシュミットは、射手や役者のたとえを用いて、このことを説明している。すなわち、射手がなすべきことは、的を射ることではなく、ただ弓を射ることであり、役者がなすべきことは、ただ「演じること [représenter]」なのであり、役との同一化ではないのである (*Le*

system stocien et l'idée de temps, pp. 145-146頁)。同様に、外的原因にさらされているため、必然的に表象が形成されることになるが、各々の魂がすべきことは、表象される内容に左右されずに、表象することそのものなのである。

それでは、ドゥルーズのいう把握的表象に着目すれば、いかに表象の使用は理解されるだろうか。つまり、人間の魂は、自分自身のロゴスを通じて、命題を形成するのだが、ここから、外的原因に由来しない表象の使用を取り出せばどうなるのであろうか。命題とは、出来事の表現を含む同定された対象の認識であるため、ここでのロゴスの自発性は認識することに求められる。そのなかでも、物体に由来せず、純粋にロゴスに由来するものは、非物的に物体を分節するという作用そのものであるだろう。つまり、把握的表象を使用することとは、純粋な出来事の表現を用いて認識することなのである。これは、われわれがすでにみた不定法の動詞に対応している。表象の使用という思考の作用に、純粋な非物的なものの表現をみとり、そこに重点を置くドゥルーズの解釈は、ストア派の意図を裏切るものである¹⁰⁾。しかしながら、繰り返すように、物体の秩序を棄て去り、思考の秩序に身を移すことが狙われているわけではない。「[……] 出来事が、物的原因の深層によって、また、物的原因の深層において、既に生産されつつあるのでなければ、賢者が非物的出来事の準原因になってその受肉を意志することができるだろうか」(LS p. 172/上256頁)と論じられるように、われわれが物体である以上、出来事は物体のなかで準備されなければならない。また、表象の使用は、表象に内在する魂の作用であるため、実現なしの表現でもない。「表象の使用は、出来事の実現に対していかに限られた現在を指定するにしても、初めから出来事の実現に伴っている」(LS p. 169/上251頁)といわれるように、純粋な表現があるところには、必ず、表象におけるその実現があるということである。これは、意志される出来事が実現すると論じたマルクス・アウレリウスの哲学に接近するものであり、ドゥルーズとストア哲学はそれほど遠くないようである¹¹⁾。純粋な表現を論じつつも、ドゥルーズが念頭においているのは、出来事の実現であり、物的な世界に非物的な出来事を交差させることなのである。

このようなドゥルーズの態度は、「非物的なものへの軽蔑」(Incorporels, p. 63/103頁)を示すストア派の人々のように、物体の次元を重視するものではない。しかしながら、非物的なものに「無限なる神」を見出し、現世を棄て彼岸である空虚に到達することを望む「グノーシス主義」とも異なる(Incorporels, pp. 51-52/85-86頁)。ドゥルーズは、出来事なき物的世界から身を離そうとするが、それを完全に棄て去ることはないのである。ここでは、あくまでも物体と非物的なものの境界線上に、その表面にとどまることが望まれているのである¹²⁾。『意味の論理学』の狙いが物体と非物的なものの二重化にある以上、そこでは、同一性に従属させられる危険がありつつも、出来事は「表象されるべきもの」なのである。

おわりに

繰り返し指摘してきたが、『差異と反復』の表象批判の論点と同様に、『意味の論理学』の把握的表象は、出来事という同定不可能な対象を、同定可能な対象のもとに、すなわち対象の同一性のもとに貶めている。

また、そこから論じられる権利上の純粋な出来事の表現は、『差異と反復』の即自的差異に関する議論と同型である。しかしながら、ストア派的二元論を採用する『意味の論理学』においては、表象の形成がなくては、一切の表現は得られない。このことは、第一に、われわれが純粋な非物的なものの次元に属することの不可能性を示しているだろう。『意味の論理学』で描かれる超越論的領野は、純粋に非物的で、形而上学的な領野であるため、物的身体を持たざるを得ないわれわれは、出来事を実現した姿形からしか認識できない。たとえ、権利上、その純粋な姿形の表現を抽象できるようにしても、それは物体の運動という経験的側面を前提としている。第二に、出来事の同一性のなかでの「失墜」に陥る危険を踏まえつつも、出来事の表現を論じるドゥルーズにとっての眼目は、単に同一性を退けることにはない。『意味の論理学』では、ストア派の物体に、認識的分節以前の、純粋な質料の世界が描かれており、そこでは、一切が同じところにとどまることなく流れていく生成の狂気が語られている。『意味の論理学』が、同一性批判だけを目的とするのであれば、この「狂気-生成」だけで事足りる。それにもかかわらず、ドゥルーズが出来事の表現による物体への介入を論じていることには、この意味なき物体の世界を退けるという企図があるだろう¹³⁾。この二点は、いわば、即自的差異の領域（純粋な非物的な領域と純粋な物体の領域）に身を置くことの不可能性を示すものであり、表象における同一性の優位に対する批判からは引き出されない論点といえる。『意味の論理学』は、意味なき物体の世界から身を離すために、出来事を同一性に閉じ込めるという危険を承知のうえで、表象による実現を必要としているのである。

ところで、『意味の論理学』が表象という契機を必要とすることは、その独自の問題設定だけでなく、その限界も示しているのではないだろうか。つまり、『意味の論理学』の諸概念では、出来事の実現が上手く捉えられていないのではないだろうか。もちろん、『意味の論理学』でも、表象がもたらす同一性から抜け出すための措置は取られている。たとえば、本稿が取り上げた権利上の表現は、表象によりもたらされる同一性に対抗するものであり、ドゥルーズは、そこで出来事に固有の秩序を担保しようとしている。また、詳論できないが、ドゥルーズは、永遠回帰により純粋な出来事を引き出そうともしている。しかしながら、純粋な表現が表象による実現を前提としているように、永遠回帰でも、表象により形成された同一性を解体することが問われているため、表象が完全に振り切られるとは言い難いだろう（LS p. 208/下10頁）。

また、言葉の使用が出来事の実現として捉えられるため、『意味の論理学』の言語論は表象に制限されている。そこでの言葉は、出来事を実現させた物体との「連続性」により捉えられるため、独自の表現形態をもつことができない（LS p. 151/上223頁）。たとえば、「カトーが歩く」という命題と「カトー」という対象のように、両者には対応関係がある。『言葉と物』において、フーコーは、古典主義時代を取り上げて、表象の空間における言葉と物の対応を論じたが、『意味の論理学』は、こうしたソシュールの言語論を脱するものではないのである（『言葉と物』p. 81/92頁）¹⁴⁾。

そうであれば、しばしば指摘されるガタリとの協働作業以降のドゥルーズの思想的転回の内実を、表象に依拠した実現-表現論の乗り越えとして捉えることもできるだろう。特に、『千のプラトー』の諸概念は、『意味の論理学』が抱える困難な状況を打破し得るものである。たとえば、シニフィアンとシニフィエという対の代わりに用いられる、「表現」と「内容」の対を挙げることができる。物としての「監獄」が、もはや「監獄」

という語ではなく、「犯罪者」や「犯罪行為」といった言表の集合に結び付けられるように、ここではもはや表象の空間は問題にならない（『千のプラトール』p. 86/上147頁）。また、語用論や社会言語学を援用し、言語の実践的側面を論じる「指令語 [mot d'ordre]」や「発話の行為 [acte de parole]」を挙げることもできる。実現という契機を必要としながらも、それを上手く描けなかった『意味の論理学』と引きつけることで、『千のプラトール』（あるいは『フーコー』）の試みを評価することができるだろう。

本稿は、表象と出来事に関する理論の解明を通じて、『意味の論理学』に独自の狙いとその限界を指摘するに至った。ここからさらに論じるべき問題は多いが、また別の機会を俟つことにしたい。

文献

（括弧内は、論文中に指示する際に用いた略号。邦訳があるものはそれを参考にしたが、引用に際しては、一部訳を変更した）

マルクス・アウレリウス『自省録』『世界の名著 13 キケロ エピクテトス マルクス・アウレリウス』鈴木照雄訳、中央公論社、1968年。

Sean Bowden, *The Priority of Events: Deleuze's Logic of Sense*, Edinburgh University Press, 2011.

Émile Brehier, *La théorie des incorporels dans l'ancien stoïcisme*, Vrin, 1908/『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』江川隆男訳、月曜社、2006年。（Incorporels）

———*Crychippe et l'ancien stoïcisme*, PUF, 1910.

———『哲学の歴史 2——ヘレニズム・ローマの哲学』渡辺義雄訳、筑摩書房、1985年。

クリュシッポス『初期ストア派断片集 2』水落健治・山口義久訳、京都大学学術出版会、2002年。（SVF II 引用で用いた漢数字は断片番号を示す）

———『初期ストア派断片集 3』山口義久訳、京都大学学術出版会、2002年（SVF III）

Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968/『差異と反復』（上下巻）財津理訳、河出文庫新社、2007年。

———*Logique du sens*, Minuit, 1969/『意味の論理学』（上下巻）小泉義之訳、河出文庫新社、2007年。（LS）

———*Foucault*, Minuit, 1986/『フーコー』宇野邦一訳、河出書房新社、2007年。

Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie 2*, Minuit, 1980/『千のプラトール——資本主義と分裂症』（上中下巻）宇野邦一ほか訳、河出書房新社、2010年。

江川隆男「出来事と自然哲学——非歴史性のストア主義について」『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』、月曜社、2006年。

Michel Foucault, *Les mots et les choses*, Gallimard, 1966/『言葉と物』渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、1974年。

Victor Goldschmidt, *Le système stoïcien et l'idée de temps*, Vrin, 1953.

近藤智彦「「出来事」の倫理としての「運命愛」——ドゥルーズ『意味の論理学』におけるストア派解釈」小泉義之、鈴木泉、檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』平凡社、2008年。

———「ヘレニズム哲学」『西洋哲学史 II』、講談社、2011年。

小倉拓也「出生外傷から器官なき身体へ——ドゥルーズにおけるメラニー・クライン受容とその限界」日仏哲学会、2013年。

———「ジル・ドゥルーズの哲学における意味と感覚の理論についての人間学的探究」大阪大学大学院人間科学研究科、2015年。

上野修、「意味と出来事と永遠と」小泉義之、鈴木泉、檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』平凡社、2008年。

André-Jean Voelke, *L'idée de volonté dans le stoïcisme*, PUF, 1973.

注

- 1) 本稿では、非物的なものの理論を完成させたとされるクリュシッポスの定義に従う。「そこでクリュシッポスは、この「刻印 [τύπωσις]」はゼノンが「変形 [ἐτεροίωσις]」の代わりに語ったのであり、「表象は魂の変形である」というのが「本来の」言葉であると考えた。なぜなら、多くの表象がわれわれに生起する場合に、同一の物体が同時に多種多様な変形を受け取ることはもはや非合理ではないからである。というのも、空気は、多くの人々が同時に音声を発する場合に、同時に無数の異なった振動を受け取り、瞬時に多くの変形をも把持するが、同様に、主導的部分もまた、多様な表象を行なうとき、これと類比的なことを被るだろうからである」(SVF II 五六 [] 内は訳者による)。
- 2) ストア派は、個体を、固有の形質と素材の不可分な混合として捉えた。存在の仕方が個体のもつ形質に関与しないことはここに起因する。固有の形質は、他のものから、その個体を区別するものであり、近藤智彦は、これをライブニッツの「付加識別者同一の原理」になぞらえている（「ヘレニズム哲学」58頁）。また、この形質は、その運動により、個体を形づくる原因となるため、スピノザの産出的原因とも比されている（*Incorporels*, p. 4/15頁）。
- 3) 「そこで〈表象〉とは、魂の内に生起するパトスであり、自分自身と作動者とをしめすものである」(SVF II 五四b)。
- 4) ストア派は、繫辭を排し、動詞だけを命題のうちに認めたが、それは、個体論の帰結である。唯一つの固有の形質により定義される「個体 [individu]」が、複数の形質をもつことはあり得ず、物体間にみられる変化は、あくまでも様態として認められるのみである。このことに相応しい表現として動詞が採られたのである。
- 5) ブレイエが指摘するように「表現可能なもの [exprimable, λεχτόν]」と「意味されるもの [signifié, τóσημιον ὁμείον]」は同一視されない（*Incorporels*, p. 15/31頁）。そのため、物体において実現されることと命題において意味されるものは、厳密には区別される。ドゥルーズ自身は、両者をおおよそ同じものとみなしているようだが、江川隆男は、この相違点を強調し、『意味の論理学』の言語論を批判している。江川は、非物的なものを生産する身体に着目し、そこから非物的「変形 [transformation]」を論じている（「出来事と自然哲学——非歴史性のストア主義について」189-194頁）。本稿でも、『意味の論理学』の限界点を論じるが、それはあくまでも実現を果たす表象に対するものであり、江川の批判とは水準を異にする。
- 6) 「〔原因として物理的痕跡を残す表象がある一方で〕また別の表象は、このような性質をもっておらず、魂の主導的部分はこれらについての表象をもつものこれらによって表象をもつものではない——たとえば、非物的なレクトンの場合がこれに該当する——というのである」(SVF II 八五 [] 内は訳者による)。このことは、原因を契機として、それに適合するように非物的なものが表象されるとも論じられている（André-Jean Voelke, *L'idée de volonté dans le stoïcisme*, PUF, 1973, p. 44）。
- 7) ブレイエは感覚認識による把握を強調していたが、以下のように、ストア派が命題による把握を考えていたことを示す断片もあり、一概にドゥルーズのいう把握的表象が誤りとはいえないように思われる。「さて、彼ら〔ストア派の人々〕によれば、把握とは、白いものや黒いもの、ザラザラしたものやなめらかなもの感覚認識によって生ずるとともに、論証によって結論されるもの——たとえば、「神々は存在する」、「神は予知する」ということ——のロゴスによって生ずる」(SVF II 八四 [] 内は訳者による)。また、邦訳者の水落は、この箇所、ロゴスによる把握が命題により説明されることに注意を促している（SVF II 93頁、註3）。また、本稿と同様に、把握的表象を命題とする解釈は、Sean Bowden, *The Priority of Events: Deleuze's Logic of Sense*, Edinburgh University Press, 2011 にみられる。
- 8) 従って、本稿の試みは、ストア哲学の観点から静的発生を論じることといえなくもない。しかしながら、ドゥルーズの静的発生論では、ライブニッツの「共可能性」概念に基づいて、世界の発生までが語られるため、厳密に一致

するわけではない。ストア哲学の論理学ではそこまで記述できないからこそ、ライプニッツの哲学が用いられるのである (LS p. 200/ 上 297-298 頁)。

- 9) 命題において実現されたかたちである現在形と不定法という動詞の二つの形については、以下を参照されたい (LS p. 216/ 下 21-22 頁)。
- 10) ゴルトシュミットやドゥルーズは、初期から後期までストア哲学を体系的に再構築するという読解方針のもとに成立しており、たとえば、ピエール・アド (あるいは最晩年のフーコー) のような解釈と折り合うものではない。こうしたドゥルーズの読解をストア哲学から離れるものとする解釈として、近藤智彦「「出来事」の倫理としての「運命愛」——ドゥルーズ『意味の論理学』におけるストア派解釈」がある。また、近藤と同様に倫理的観点から、*The Priority of Events: Deleuze's Logic of Sense* にもドゥルーズの表象の使用への言及がある。
- 11) たとえば、マルクス・アウレリウスの「[[君の魂の] 支配的部分とは、己を目覚めさせ、わが方向を定め、意のままに己を形づくり、また、すべての出来事を自分の望みどおりの姿に、自分の眼に映じさせる、そういう部分である」(『自省録』第六巻第八節、[] 内は引用者による) という一節がある。André-Jean Voelke は、表象と意志の内的な関係から解釈して、意志された出来事だけが実現するのだと論じている (*L'idée de volonté dans le stoïcisme*, p. 45)。こうした論点は、道化役者の「反-実現 [contre-effectuation]」に対して、「実際に到来することのphantasmagoria」(LS p. 188/ 上 280 頁、強調原文) に帰せられるそれとかかわるだろう。ドゥルーズ自身が、「自分自身で伴奏しなければならない [Il faut s'accompagner soi-même]」(LS p.188/ 上 280 頁) と語っていることを踏まえると、たとえば、上野修がここに「対立旋律 [contre-point]」や「副署 [contre-signature]」などのイメージを読み込んでいるように(「意味と出来事と永遠と」36 頁)、実現を伴うものについては、「副-実現」などのように、訳し分ける必要があるように思われる。
- 12) こうした態度は、『意味の論理学』におけるドゥルーズが、アルトー的な「器官なき身体」ではなく、ブスケ (あるいはキャロル) 的な「出来事の息子」を取ることにみることができるだろう。アルトーの「器官なき身体」は、自然そのものである神のヴィジョンに達するストア派のモラルと重ねられ、そこからの自由の導出が語られている (LS p. 109/ 上 163 頁)。そこでは、原因は統一性を有しており、物体は、〈大混在 [Grand mélange]〉、「全混合 [tout mélange]」と呼ばれる完全な混合の状態にある (LS p. 157/ 上 233 頁)。ドゥルーズは、アルトーの「叫び-息」によるこうした混合の形成に絶対的な能動性を見出しているが、ストア派の議論に即する限り、これは運命=神との同一化と理解できる。これに対してドゥルーズが取るのは、ブスケのような「出来事の息子」であり、出来事を実現する観念的な原因性(準-原因)との同一化による自由である。これは、物体的秩序からの訣別を意味するが、決して純粋な非物的な出来事になることではない。「処女懐胎/穢れなき御宿り [immaculée conception]」(LS p. 175/ 上 260 頁) というキリスト教的な色合いの強い言葉で語られるように、この物体的世界に「御言葉/〈動詞〉 [Verve]」(LS p. 216/ 下 22 頁) が受肉することである。物体ではなく非物的なものの側での自由のための技法は、「静的発生の技法」(LS p. 166/ 上 247 頁) と語られるように、あくまでも出来事の実現に根差しているのである。また、本稿では扱えないが、精神分析および動的発生の観点からの器官なき身体の導出については、小倉拓也、「出生外傷から器官なき身体へ——ドゥルーズにおけるメラニー・クライン受容とその限界」日仏哲学会、2013 年、に詳しい。
- 13) カオスとして記述される悪しき深層と、それに対する闘争については、小倉拓也「ジル・ドゥルーズの哲学における意味と感覚の理論についての人間学的探究」大阪大学大学院人間科学研究科、2015 年に詳しい。
- 14) また、「物は、表象のくぼみに現われるため、言説の縁まで来ているのだ」(『言葉と物』p. 142/153 頁) といった博物学に関する記述も参照されたい。

The Theory of Representation and Event in *The Logic of Sense*

Kimitake HIRATA

Abstract:

In *Difference and Repetition*, Deleuze criticizes the priority of identity and avoids the representation in order to think about the difference in itself. Nevertheless, in spite of the same intention to describe the transcendental field, Deleuze, in *The Logic of Sense*, argues that the event is what must be represented. Here, it is certain that there is an important change in Deleuze's attitude.

In this paper, we hypothesize that Deleuze, because of the introduction of the stoic dualism of bodies and incorporeals into *The Logic of Sense*, problematizes the incarnation of the event (the incorporeal) and the theory of representation. First, focusing on Stoicism, we describe the theory of representations, which comprehends an expression of the event and materializes the incorporeal, and then demonstrate that Deleuze needs this representation in order to the expression and the thought of the incorporeal. This attempt will reveal an aim and a limitation of *The Logic of Sense*.

Key Words : representation, event, effectuation, expression, Stoicism.